歩いて発見。津の魅力

171

歴史散歩

桃園の三地蔵－鎌倉時代の石仏－

久居地域の桃園地区にある宝樹寺(牧町)、栄松寺(川方町)、光明寺(新家町)には、それぞれ鎌倉時代に造られた石造地蔵菩薩像が伝来しています。しかも、その制作年は全て正和３(1314)年で、制作年が明らかな石仏では県内最古のものであり、いずれも三重県指定有形文化財となっています。

宝樹寺の地蔵菩薩は右手に錫杖を、そして左手は膝の上に乗せて宝珠を持ち、右足を上に組んだ座像で、一つの砂岩から本体と光背を彫り出した総高約２ｍの像です。光背の左右には、「正和三年甲寅八月廿九日建立之」「願主左衛門少尉源幹重」と銘文が刻まれています。

宝樹寺の地蔵菩薩坐像

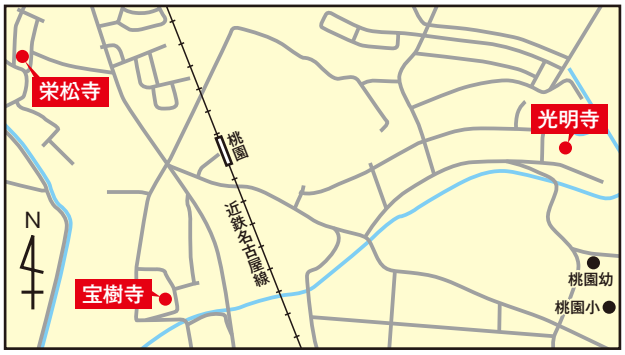
栄松寺の地蔵菩薩は立像で、方形の凝灰岩から光背の形に彫り、厨子状になっています。その中の台座の上に立つ像高60cmほどの像は、右手に錫杖、左手に宝珠を持っています。像の左右には「正和三年甲寅八月十六日造立之」「願主沙弥淪海」と銘文が刻まれています。

栄松寺の地蔵菩薩立像

光明寺の地蔵菩薩も立像で、光背や台座を含めた像全体を２ｍほどの一つの砂岩から彫り出しています。他の２体同様に右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、光背の右側には「正和三年甲寅八月廿四日　願主沙弥道観」と刻まれています。建立者の沙弥道観は光明寺の住僧で、建武２(1335)年に亡くなったとされています。

光明寺の地蔵菩薩立像

この３体の地蔵菩薩はごく近い距離にあって、しかも制作年が同じであることから、何らかの関係があると思われます。また、像の材質が宝樹寺と光明寺は砂岩で、栄松寺は凝灰岩、形状も座像・立像でそれぞれ異なった彫り出し方である点も非常に興味深いものです。

これらは、その顔立ちの表現が似ていることから、作者は同一人と推定されますが、これだけ違う形式を制作できるということは、かなりの技術を持った石工と考えられます。

700年以上前に作られた鎌倉時代の石仏は、現在でもその表情の豊かさやふっくらとした量感を感じさせてくれています。